

氏 名：松 本 佳 子

学 位 の 種 類：博士（看護学）

学 位 記 番 号：甲 第 4 2 号

学位授与年月日：平成 2 3 年 3 月 1 6 日

学位授与の要件：学位規則第 4 条第 1 項該当

論 文 題 目：精神科病棟における演劇的体験としての「娘グループ」

—傷ついた女性同士がつながることは可能か—

“Daughters Group” as Dramatic Experience on a Psychiatric  
Ward : Is It Possible for Traumatized Women to Relate to One  
Another?

論文審査委員：主査 武 井 麻 子

副査 守 田 美奈子

副査 平 澤 美恵子

副査 筒 井 真優美

副査 鶴 田 恵 子

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 【研究の動機と背景】

日本では、精神科においても入院治療の急性期化などに伴い、入院患者の疾病構造が変化しており、多くの病棟で長期入院の中高年層と短期間だが入退院を繰り返す若い患者層との二極化現象が見られている。申請者が勤務する病棟では、とくにさまざまな問題行動により医療チームを混乱させ、困難事例となっている若い女性患者のケースが目立った。彼らの多くは対人関係に困難があり、薬物治療だけでは回復は難しい独特の生きにくさをもっていた。家族に問題があることも多く、いずれ入院が長期化する可能性も高い。

こうした傾向をもつ患者についての先行研究では、チームでの関わりやお互いの感情を自由に話すことのできる環境の重要性が示唆されており、患者同士のグループの有効性も示されているが、こうしたセルフヘルプ的なグループは、医療施設外の地域か依存症専門病棟などで行われていることが多く、一般の精神科病棟で看護師が実践するグループについてはあまり研究されていないのが現状である。

### 【研究目的】

申請者が非常勤看護師として勤務する精神科病棟で、女性患者を対象としたグループを実施し、同じ娘として語り合うことを通して、参加者間にどのような相互交流が生まれ、語りにどのような変化がもたらされるのかを観察、分析する。また、それにより、傷ついた女性同士が相互理解の上に立った確かなつながりをもつことの可能性について考察する。

さらに、その実践を通して、精神科における患者と看護師の新たな関係性を探求し、精神科に入院する女性患者への看護援助についての示唆を得る。

## 【研究方法】

本研究は、病棟での参与観察（フィールドワーク）に加えて「娘グループ」と名付けたグループワークをアクションとして用いた実践研究である。フィールドワークは2008年11月から2010年7月まで、娘グループは2009年5月から2010年7月まで行った。

申請者は、研究協力の同意が得られた精神科病棟に非常勤看護師として勤務しながらフィールドワークを行い、週に1回女性患者を対象とした茶話会形式のグループを実施し、そこでの語りや参加者同士の相互作用を観察、録音するとともにフィールドノーツに詳細に記録した。その際、申請者はもう一人の病棟看護師とともに、コンダクターとしてグループの運営に当たると同時に、同じ一人の女性としての立場でグループに参加した。また、開催後は毎回レビューを行い、病棟看護師を交えて出来事を振り返った。

最終的に、録音データから逐語録を作成し、フィールドノーツと照らし合わせながら、参加者たちの言動の意味やその変化を再構成した。

## 【倫理的配慮】

本研究は日本赤十字看護大学の研究倫理審査委員会の承認（第2009-71）を得て実施した。

フィールドでは、事前に院長、看護部長、師長に研究を前提に非常勤看護師として勤務したいことを伝え、了承を得た。院内のスタッフや病棟の患者には、コミュニティ・ミーティングで自分の立場と研究の意図を伝え、院内ニュースにも掲載した。

グループ開催にあたってはポスターでその趣旨を書いて呼びかけ、自由意思による参加であることを保証し、開始時および新規の参加者が加わるたびに研究のためのグループであること、録音することなどについて文書資料を提示しつつ口頭で説明し、了解を得た。また、コ・コンダクターの看護師にも口頭での説明と文書にて研究協力の同意を得た。

フィールドノーツへの記載、および論文作成に当たっては、個人が特定されないよう匿名とし、具体的な内容は意味に差しさわりのない限り変更を加えることとするなど、プライバシーの保護に努めた。

## 【結果】

「娘グループ」は1年3ヶ月にわたり、全63回実施された。若い世代だけでなく、あらゆる年代の女性達が集まり、参加人数は1回あたり平均8.1人であった。

〔開始期〕では、いきなり家族や病気について語られたが、淡々と事実を述べるにとどまっていた。その中で20代のある患者と40代の患者との間で親密でいながらライバル的な関係が見られ、二人の複雑な家族背景がグループの中に映し出されるようになっていった。また、性的な外傷体験を語る患者も現れる一方で、更年期の話題など女性ならではの悩みも語られるなか、母親への否定的な感情も口にされるようになった。

〔展開期〕では、上の20代の患者が退院し、グループは自慢話を続ける前述の40代の患者の独壇場となった。やがて、他のこれまで目立たなかった患者たちも自分を認めてほしいと競い合うように話をし始めるようになった。そして、次第に参加者それぞれの居場所のなさや空虚感が明らかになっていき、母親の死や離婚といった喪失体験や悲惨な外傷体験が語られるようになった。

〔終結期〕では、前述の40代の患者とコンダクターである申請者との間に緊張が生じ、甘えたくても甘えられない患者の母子葛藤が露わになった。患者からの辛辣な言葉に思わず申請者が涙すると、他の参加者たちは次々と申請者に自己を投影し、ある者は申請者を擁護し、ある者は自ら

の親の死にまつわる悲しみや罪悪感を初めて語った。また、グループの終結と別れが近づくと、耐えられない患者は次々と去り、参加者たちは取り残された者同士の一体感の中で、結びつきを強くした。最後に、ある参加者がはなむけの歌を歌い、「生き分かれはやだ」という辛く受け入れがたい現実と向き合う言葉が発せられた。

#### 【考察】

参加者たちの中には、母であり、妻である者もいたが、彼女たちは何よりもまず「娘たち」であった。彼らはいずれも同性である母親との関係の中で、見捨てられたり甘えたいのに甘えられない葛藤を体験したりしてきていた。また、成人してからも女性との関係の中でさまざまに傷つけられ、根深い不信感を抱えていたのである。そして、何よりも、自分を認めてもらえない、受け止めてもらえないという悲しみと怒りがそこにはあった。

そうした関係にまつわるさまざまな感情がグループの中に投げ込まれ、参加者たちは語りや歌、そして行動を通して、これまで誰にも語られないまま抱えてきた自己の思いを、それぞれのやり方で表現するようになった。それはさながら即興劇のようであり、グループはまさに病棟生活という日常の中の非日常の舞台であった。一度では聞き取れないようなかすかな言葉や繋がりが見えない行動にも彼らの思いや対処パターンが隠れており、それぞれがグループにおいて独自の役割を担っていた。そしてその役割は、彼らが生きてきた関係の中で果たしてきた役割とつながっており、傷ついた親を何とかして助け救おうとする娘としての思いや体験を見て取ることができた。

なかでも、コンダクターには母親に対する参加者のさまざまな感情が投影されていた。それはアンビバレンスに満ちた感情であり、ときに強烈で、コンダクターにとっては耐えがたいものでもあった。しかし、その耐えがたさを、コンダクターが巧まずして役割意識を捨て、素直に表現し涙したことが、参加者たちの自発的な語りを促し、抑圧されていた感情が表出されるきっかけとなった。さらに別れという共通の喪失体験を乗り越えることにより、スタッフと患者の垣根を超えた確かな繋がりを感じたのである。

## 論文審査の結果の要旨

本研究は、申請者が非常勤看護師として勤務する形でフィールドワークを行いながら、病棟プログラムの一つとして病棟看護師とともに女性患者だけのグループを実施、そのコンダクターを務めるという看護研究ならではの方法を用いたユニークな実践研究であり、臨床的な価値も高い。

結果では、現場のダイナミクスが生き生きと描き出されている。研究参加者となった女性患者たちの生々しい人生の語りは痛々しく、ときに読み進むのが苦痛に感じられるほどである。こうしたリアルな語りが得られたのも、申請者が1年9カ月にわたって病棟看護師としてともに生活する中で、患者たちと真摯に向き合ってきたからこそと評価される。また、病院挙げての研究への協力もこれだけの成果をもたらした大きな要素であり、そこに現場との協力に基づく実践研究としての価値も大いに認められるところである。

また、考察において、グループを参加者のまなざしに支えられた自己表現の場、すなわち「舞

台」と捉え、参加者の言葉や動作の一つ一つをその舞台で演じられた即興劇として見る視点によって、患者の言動をグループの文脈の中で分析・解釈する枠組みが与えられることになり、そこから言葉でははっきりとは語られない隠された意味までもが明らかにされた点は、特筆すべき本研究のオリジナリティといえる。

本研究が示しているのは、看護師と患者がただ時間と場所を共にし、話をしたからといって、即座に「確かなつながり」が生まれるものではないという事実である。生育史の中で深く傷ついた患者が抱く根深い人間への不信感をぬぐい去るのは容易なことではない。本研究で申請者が体験したように、患者のアンビバレンスに満ちた感情を投影される看護師は、その都度、強烈な感情にさらされ、自己が試されるのである。しかし、申請者が患者から投げつけられた辛らつな言葉にコンダクターとしての鎧がはぎとられ、思わず自らの弱さをあらわにして涙したとき、初めて患者とスタッフの境界を越えた「確かなつながり」の感覚が共有されたという発見は、精神科看護のみならずさまざまな領域の看護にとっても貴重な示唆となるだろう。

博士学位論文審査専門委員会では、審査の結果、本論文を学位規定第3条により、博士（看護学）の学位論文としてふさわしい水準にあると認め、「合格」と判定した。